

韓国語と日本語の turn の 展開から見たあいづち発話

金 珍 娥

【要旨】 본 연구는 <turn 전개> 라는 관점에서 한국어와 일본어의 청자반응발화 (back channel utterance) 의 기능을 규명하고자 한 것이다. 본고는 청자반응발화가 (1) turn 을 구성하는 발화이며, (2) turn 이행에 직접 관여하는 기능과 관여하지 않는 기능을 가지고, (3) turn 존재양식에 따라 상대방의 turn 과 공존하는 것과 독립된 것이 있다, 라는 3 가지 시점을 제기하였다. 그리고 이러한 시점을 중심으로 상대방의 turn 과 <독립> 된 청자반응발화가 (1) <turn 유발기능> 과 (2) <turn 이행표지의 기능> 이라는 2 가지 기능을 실현하며, 동적인 역할을 수행하고 있음을 논의하였다.

한편 turn 존재양식의 관점에서 실제 담화자료를 바탕으로 청자반응발화를 살펴본 결과, <공존> 하는 청자반응발화는 일본어가 한국어의 3 배 정도 높은 비율을 보이고 있으나, <독립> 된 청자반응발화는 한국어가 일본어 이상의 비율을 보이고 있음을 확인하였다. 또한 청자반응발화가, 일본어에서는 시간이 흐름에 따라 빈도가 높아지나 한국어에서는 담화의 첫 부분에서 빈도가 가장 높고 시간이 흐름에 따라 감소하는 경향을 보이고 있다. 이는 한국어와 일본어의 청자반응발화가 실현되는 양상은 다르나 turn 유발기능과 turn 이행표지의 기능을 실현시키며, 담화의 다이내미즘을 생성하고 있음을 보여 주는 것이다.

目 次

- | | | | |
|-----|--------------|-----|----------------------------|
| 1 | はじめに | 2.1 | あいづち発話の定義 |
| 1.1 | 研究目的 | 2.2 | あいづち発話の発話機能と turn 移行の問題の区別 |
| 1.2 | 先行研究 | 2.3 | turn とは如何なるものなのか |
| 1.3 | 先行研究の問題点 | 3 | あいづち発話の機能 |
| 2 | あいづち発話と turn | | |

3.1 turnの移行に関する／非関与的 なあいづち発話の機能	4.1 調査方法
3.2 あいづち発話の存在様式	4.2 あいづち発話の時間軸に沿った 変化
3.3 あいづち発話の“turn移行の標 識の機能”と“turn誘発機能”	4.3 turnの存在様式から見たあいづ ち発話
4 turnの展開からのあいづち発話	5 おわりに

1 はじめに

1.1 研究目的

日常生活の中で私たちが家族や友人と何気なく交わしている話には、常に話し手と聞き手という立場が存在する。そして聞き手が話し手となり、話し手は聞き手となる、こうした繰り返しの過程を通じて談話は成り立っていく。聞き手の立場になると、話し手の話に対して、聞き手は聞いているという何らかの反応を示し、話し手は聞き手のそうした反応を確認しつつ、話を進めていくのである。話し手が話している間に、聞き手が何の反応も示していない会話を想定してみよう。会話は円滑に進むことができなくなるであろう。

実際、聞いているという聞き手の信号の発話、すなわちあいづちと呼ばれる発話の重要性は多くの先行研究でもすでに指摘されている。つまり、聞き手が聞いているということを示すあいづち発話は、談話の中心的内容にかかわる発話ではないにもかかわらず、そうしたあいづち発話なくしては、談話は成り立ちえないほど、談話を支える根本的な役割を果たしているのである。

本稿は韓国語と日本語の談話におけるこうしたあいづち発話を“turn”として位置づけ、時間軸に沿って繰り返されるturnの展開という観点から、その機能を描くことを目指すものである。

1.2 先行研究

あいづち発話の機能に関する研究として、日本語においては水谷(1983,

1988)、小宮(1986)、メイナード(1987, 1993)、黒崎(1987)、松田(1988)、杉藤(1993)、堀口(1997)など、多数の研究があり、聞いていること、理解、同意などを表す機能、タイミング、表現形式などに至るまで、日本語におけるあいづち発話の様々な機能を明らかにしている。韓国語に関しては、生越(1988)が学生のレポートを対象にあいづちの打ち方、相手や場面による違い、形式などに触れており、^{オ・スンジン} 오승진(1997)では、間投詞が果たす機能の1つとして「聞き手反応表示(backchanneling)」を挙げている。韓国語と日本語の対照研究である、任榮哲、李先敏(1995)、李善雅(2001)などでは、韓国語より日本語におけるあいづち発話の頻度が高く、より多様な様相を示していることが報告されている。

一方、turnと関連してあいづち発話に言及している研究は、日本語に関しては、メイナード(1987, 1993)、ザトラウスキー(1993)、Murata(1994)、小室(1995)、黒沼(1996)、陳姿菁(2001)などがあり、韓国語については^{イ・ウォンピョ} 이원표(1999)、日本語と韓国語の対照研究では、舟橋(1994)、金志宣(2000)、金珍娥(2003a)がある。いずれもあいづち発話の頻度、様相、機能などに関して言及している。しかし、メイナード(1993)、ザトラウスキー(1993)、Murata(1994)、小室(1995)、黒沼(1996)、舟橋(1994)、金志宣(2000)、陳姿菁(2001)などでは、turnもしくはturn-takingを「話者交代、発話権、発話権の交替、発話順番」などと定義し、あいづち発話をturnもしくはturn-takingの発話として認めていない。すなわちあいづち発話は「ターン」ではないと捉えている点で共通している。

1.3 先行研究の問題点

先行諸研究における最も大きな問題点は、あいづち発話をturnとして捉えていない点、また、その結果としてあいづち発話をturn-takingしうる発話として認めていない点である。そこには、2つの原因を考へうる。

まず、1つ目は、先行諸研究ではturnとturn-takingの厳密な定義や区別がなされていないこと、2つ目は、先行諸研究は実質的発話であるのか、あいづち発話であるのかという、発話の内容や機能から当該の発話

を turn であるかどうか規定しようとしていたことが挙げられる。

また、韓国語についての 오승진 (1997), 이원표 (1999) などの研究では、日本語のあいづち発話に相当する用語として、「청자반응표지 (backchanneling)」（聞き手反応表示）, 「청자반응발화」（聞き手反応発話）などという用語を用いているが、それらの用語の詳細な定義はなされていない。本稿では、先行研究を基に韓国語と日本語のあいづち発話を定義し、さらに turn にかかわる諸概念を、綿密に定義づけ、区別することにする。

2 あいづち発話と turn

まず、あいづち発話と turn の定義を確認しよう。

2.1 あいづち発話の定義

あいづちの発話機能にかかわる先行諸研究における定義を見ると、英語について、Yngve (1970:568) は「話し手が turn を譲ることなく、聞き手から受ける “yes”, “uh-huh” などの短いメッセージ」（引用者訳）としており、Schegloff (1982:79) はあいづち的な “uh-huh” という表現について「話の継続、注目、関心、理解を表す (continuer, attention, interest, understanding)」（引用者訳）機能を挙げている。また、日本語のあいづちの機能についてメイナード (1993) は、「続けてというシグナル、理解、支持、賛成の意志表示、感情表現、情報の追加・訂正・要求表現」の6つの機能を挙げ、堀口 (1997) は「聞いているという信号、理解しているという信号、同意の信号、否定の信号、感情の表出」を挙げている。本稿でのあいづち発話は、先行研究を踏まえ、「聞いていること、理解、同意を表す機能を持つ短い表現」として定義する。また、疑問や疑いなどの感情表出の発話や、それらの上昇イントネーションの発話でも、上記の定義における「聞いていること」の機能を果たしているものは、あいづち発話として捉える。例えば、「はい、ええ、そう、なるほど、そうですね」などの、いわゆるあいづち詞⁽¹⁾、相手の発話に関する短い繰り返しや言い換え、および間投詞のうち「聞いていること、理解、

同意を表す」機能を含むものを、あいづち発話と見る。また、あいづち的な機能を果たしてはいても、杉戸 (1987) が言う「実質的な発話」を含む表現は、本稿のあいづち発話から除外する。

また、本稿は、笑いを含めて、言語行動によるあいづち発話のみを考察の対象とし、うなづきなどの非言語行動によるあいづち表現は含まない。

2.2 あいづち発話の発話機能と turn 移行の問題の区別

本稿では、2.1のあいづち発話の定義でも確認したように、発話機能という観点からあいづち発話を規定する立場をとる。しかし、メイナード (1987, 1993) は、あいづち発話を「聞き手側から話し手に送る短い表現」と定義しつつ、「話し手が順番をゆずったとみなされる反応を示したものはあいづちとしない。なお話し手が、発話と発話の間で間をとり、その間に聞き手が送る短い表現は言いよどみの一種で、あいづちとはしない」と述べており、「発話順番」との関係からあいづち発話であるのか、否かを論じている。また、上記の先行諸研究はメイナードのこうした定義に従い、あいづち発話は「話者交代」や「発話権の交替」をなさず、「発話順番」にも関わらないとするのである。

メイナードのこのような記述は、turn の移行という談話構成の次元と発話の機能の次元を区別していないものと言える。「話し手が順番をゆずったとみなされる」ものであっても、「話し手が、発話と発話の間で間をとり、その間に聞き手が送る短い表現」であっても、「聞いていること、理解、同意」などのあいづちの機能を持っている発話であれば、それは他ならぬあいづち発話であろう。また、言いよどみはフィラー (filler) としての発話と同様に、間を埋めたり、発話を始めようとする発話機能を持つものとして考えられるが、それが、聞いていることや理解、同意を表しているのであれば、あいづち発話としての働きを持つとみなさねばなるまい。言いよどみ、フィラー、あいづちは、部分的には共通する発話機能の面もあれば、全く異なるそれぞれ独自の発話機能も持っているのである。言いよどみの発話とあいづち発話の区別は、談話の構成の

次元ではなく、発話機能の違いから捉えるべきであろう。「発話と発話の間で間をとり、その間に聞き手が送る短い表現」だから言いよどみであるとするのは、turnの移行という次元の異なる問題から発話機能を決定付けようとするものと言わねばならない。

本稿はこれに対してあいづち発話を発話機能の次元において同定するものである。なお、発話間にあつてどれほどのポーズで現れているのか、相手の発話と重なって継続しているのかなどの、turnの展開に関わる問題は、あいづち発話のみならず、全ての発話に関わるものであることを合わせて確認しておこう。

2.3 turnとは如何なるものなのか

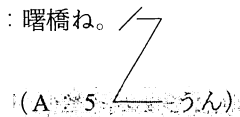
談話の本質に照らし、turnの本質的なあり方は如何なるものとして捉えるべきなのかを考察してみよう。従来の研究が主張してきたturnの捉え方を顧み、〈turn〉と〈turn-taking〉に関する新たな概念を提起し、明確にしておく。さらに、本稿で新たに用いられている〈turnの移行〉と〈turnの展開〉に関する定義づけも行う。

2.3.1 従来のturnとあいづち発話の捉え方

turnを「発話順番」と定義しているメイナード(1993:135)の例から、turnとあいづち発話の関係を検討してみよう。(表記方法は原文のまま：網掛けは引用者。)

【例1】

- (5.43) B : へーえ都内全然わかんない。 / Rliv. 24 (R-turn)
- (5.44) A : 詳しいから。 / Rliv. 25 (R-turn)
- (5.45) B : 曙橋ね。 / Rliv. 26/T2 (= Rliv) (R/T-turn)



例1を見ると、5.43、5.44、5.45の発話にはturnであることが表示されているが、()内のA:5のあいづち発話にのみ“turn”という表示が

なされていない。この例からもわかるように、同稿はあいづち発話をturnとして認めていないのである。すなわち結果として、全ての発話をturnとあいづち発話に分けているのである。こうした区別は単にメイナード(1993)のみではなく、他の先行諸研究でも行われている。しかし、談話の構成単位をturnとあいづち発話に分けることは適切なのだろうか。

以下の例を考えてみよう：

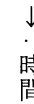
【例2】

話者A : 彼とは同い年ですか？

話者B : はい。

話者A : 専攻も同じですか？

話者B : そうです。



例2の話者Bの発話「はい」と「そうです」に注目してみよう。話者Aの質問に対する答えであるので、確かにturnとして捉えねばなるまいし、メイナード(1993)などもそうしている。しかし、次の例はどうだろう。

【例3】

話者A : 彼とは同い年で、大学での専攻も一緒なんですよ。

話者B : はい。

そうですか。

【例4】

話者A : 彼とは同い年で、大学での専攻も一緒なんですよ。

話者B : 先輩じゃないんだ。

友達だったの？



従来の研究が行っている、turn、turn-takingの「話者交代」、「発話権」、「発話権の交替」、「発話順番」という定義から例3、例4を考えてみる。例3の話者Bの発話「はい」と「そうですか」は、例2の話者Bの発話と同一の表現による発話である。しかし、話者Aのturnに重なっており、実質的な内容を含んでいないあいづち発話であることから、先行諸研究のメイナード(1993)などはこの例3の「はい」、「そうですか」をturnとしては捉えず、話者交代や発話権の交替、発話順番を成すものとも、

認めていないのである。例4の話者Bの発話「先輩じゃないんだ」と「友達だったの?」は、発話の位置上是例3の話者Bの発話と同様であるが、あいづち発話ではなく実質的発話である。先行研究の定義では、例4の話者Bの発話は「奪取・重複されたturn」として捉えられ、話者交代や発話権、発話順番の交替として認定されている。

全く同じ構造を成して現れている発話であるにもかかわらず、例3ではそれが〈あいづち発話〉であるという理由でturnとは認められず、例2では〈実質的発話〉であるという理由でturnと認めるという矛盾をきたしているのである。相手の発話と重複する発話をturnと認めうるのであれば、発話機能や意味内容の如何にかかわらず、実現された発話の全てはturnを構成する要素足りうるのだとせねばなるまい。同じく「はい」という発話が、片や「答え」としての実質的な発話となり、片や「聞いている信号」としてのあいづち発話となる、そのことは発話の機能や発話の内容の次元で扱われるべきものであって、当該の談話の中で発話が如何なる物理的な流れの中で遂行されるかという次元、すなわちturnの展開という談話構成の次元とははっきりと区別されねばなるまい。

2.3.2 従来のturnの捉え方—単線型

上でわかるように、turn、turn-takingを話者交代、発話権の交替、発話順番と定義するメイナード(1993)などの諸研究はturnの展開を以下の図のごとく認識しているのだと言えよう：

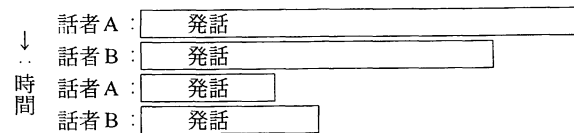


図1 垂直に表されるturnの展開(→:時間の流れ)

また、上の図1を、垂直ではなく、水平に表すと、次の図2のように、話者交代を単線的に理解しているのだということがわかる。

メイナード(1993)のごとく、turnの流れを話者ごとに変わっていく型で把握すると、例3の話者Bの発話「はい」と「そうですか」のよう

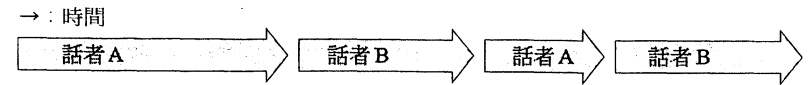


図2 turnの展開—単線型(→:時間の流れ 発話:turnの流れ)

に、turnを区切らず、談話の内容とも関わらずに相手の発話に重なっているあいづち発話はturnの流れの中に位置づけ得ない。すなわち杉戸(1987)がいう「実質的な発話」のように、談話の内容と直接的に関わっている発話のみを、既存の諸研究はturnとして捉え、turn、turn-takingを話者交代、発話権の交替、発話順番と定義しているのである。

発話の機能、意味内容をもってturnの如何を決定しようとする先行諸研究の定義では、turnの連なりで成り立っていく談話の中で、あいづちという発話が物理的に存在しているにもかかわらず、そうした存在を談話の中に位置づけ得ないことになり、談話の全体的な物理的構造に空白が生ずることとなる。先行諸研究により、談話の流れにおいては極めて重要な機能を果たしていることが明らかにされているあいづち発話が、談話の物理的な構造においてさえ位置づけ得ないならば、それは重大な問題点であると言わざるを得ない。マルコム(1999:117)は、「バックチャンネル行為」(back channel behaviour)を、サックスは「完全なターン」(complete turns)としている」と述べ、「どんな話者交代の記述にも、何がターンを構成しているのかという問題がある」と指摘し、全ての発話を「バックチャンネル」か「ターン」に分類するのは「発話間の構造的関係を記述しようとする向きには不十分」であると述べている。これは、本研究の主張を後押しする貴重な指摘である。

2.3.3 本稿におけるturnの捉え方—複線型

上のような諸問題を克服するためには、談話の流れという言語の本質的な部分に目を向けざるを得ない。実際は談話は常に話者が図式的に互いに交代しながら「単線的」に進んで行くものではなく、複数の話者の発話が同時に進んだり、途中で重なったりしながら、並行して「複線的」に進んでいくものであろう：

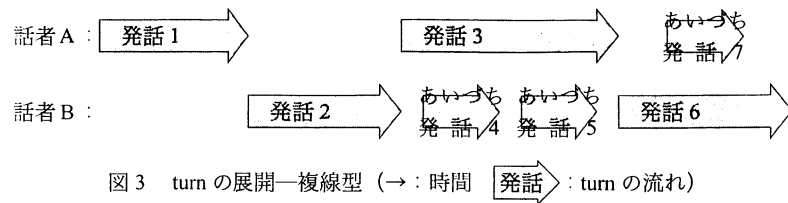


図3はturnの進行を、時間軸に沿った、言語の線条性を軸にし、表したものである。

現実には上の図3のように進行している談話構造を、既存の研究では事実上、先の図1と図2のように単線的に理解してしまっているのではなからうか。上記の談話の流れを、図1と図2のような「話者交代」で考えると、図3の話者Bの発話4、発話5のように重なって出現するあいづち発話に関しては、その物理的な存在様式を把えることができない。そこには図3の相手と重なっている発話4、発話5、発話7はturnの流れの中で全く抜け落ちてしまっているのである。しかし図3のように談話の流れを話者交代の複線的な流れの中で見据え、談話の自由な流れをありのままに見るならば、話者Bの発話4、発話5と話者Aの発話7のようなあいづち発話も実質的発話と同様、談話の物理的な位置を占める堂々たる1つのturnとしての存在を確認しうるのである。

今一度確認するならば、話者Aの発話と話者Bの発話が重なっても、重なっていなくても、また実質的発話でも、あいづち発話でも、全ての発話は談話の構造において物理的にturnとして成り立っているのである。

先行研究に対し、本稿が強く主張したいのは、如何なるあいづち発話も、発話の物理的な遂行としてturnを〈構成〉しており、turnを〈獲得〉しうる発話であることも認めねばならないという点である。こうした考え方に立つと、〈turn〉は従来の研究が述べていた「話者交代」、「発話権の交替」、「発話順番」などではなく、次のように定義し直すことができる。

〈turn〉: 1人の話者が前後の沈黙や相手の発話により発話を止めるまでの〈発話の遂行〉

turnとは発話そのものではなく、〈発話の遂行〉であるという、動的な概念であることに留意されたい。また、こうした定義に従うと、さらに「turn-taking, turnの移行, turnの展開」は、次のように定義することができる:

表1 turnにかかわる諸定義

turn-taking	turnを受け取る話者、獲得する側から見たturnの移行
turnの移行	ある1つのturnから次のturnへの移り変わり
turnの展開	turnの複数回の移行の連なり

「turnは如何なるものであるのか」を考える際、上記のような定義の概念を根幹に据えると、turnは、〈あいづち発話と実質的発話〉といった発話機能と発話内容により区別する概念ではないと言える⁽²⁾。すべての発話はturnを構成するものであり、発話の機能の側面により、あいづち発話と実質的発話は位置づけうるのである。

3 あいづち発話の機能

本稿は、3.1で述べるturnの展開という観点からあいづち発話を照らすものであるが、そうした先行研究はほとんどない。本稿は、(1)あいづち発話もturnを構成するものであること、(2)あいづち発話がturnの移行に直接関与する機能と、関与しない機能を併せ持っていること、(3)あいづち発話はすべてのturnと同様、相手のturnと共存しているものと、独立しているものとの2種があること、以上のような3つの観点から、本稿はあいづち発話の機能を考察してゆく。ここで、あいづち発話もすべてturnを〈構成〉する要素であり、ゆえにturnを自らの側に〈獲得〉する働きをしうるものであるということを明らかにしておきたい。

3.1 turnの移行に関与的/非関与的なあいづち発話の機能

turnを取るのか、渡すのか、続けるのかといった、turn移行の問題を考える時、およそすべての発話は、(1)turnの移行に直接関与する機能と、(2)turnの移行に直接は関与しない機能の2つの機能を併せ持っている

いえる。すべての発話が物理的に実現するものである以上、その内容ともあいまって、ある側面ではいやがおうでも turn の展開に関与せざるを得ないのである：

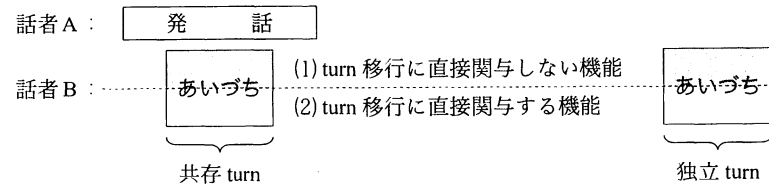


図4 turn 移行におけるあいづち発話の機能

先行諸研究で述べているあいづち発話の機能を、上の(1)(2)の2つの機能に分けて考えてみよう。2で前述した「聞いていること、理解、同意」など、堀口(1988)の言う5つの機能や、メイナード(1993)の言う6つの機能などは、図4の(1)相手からの「turnの移行に直接関与しない機能」に属する。一方で、先行研究で共通して言う「話し手の話の継続を促す機能」と、ザトラウスキー(1993)が言う、「継続の注目表示」と「発話権の交代が難しいと考えられる箇所で行われる」との機能、水谷(2001)の、「ここまでわかったから、次どうぞ」という合図で、いわば「進め」の青信号のようなもの、畠(1982)の「聞いています、話し続けてください」と、「これからしゃべり始めますというマーク」としての機能は、図4の(2)相手からの「turnの移行に直接関与する機能」であるといえる。また、これらの先行研究が言及している(1)(2)のあいづち発話の機能は、談話の流れにおけるある地点でのマーカー、もしくは信号としての機能であり、いわば点としての静的な表示機能であるといえよう。

3.2 あいづち発話の存在様式

金珍娥(2003a)で提起した、「turnの存在様式」、すなわち「時間軸の上で繰り広げられるturnの形態的、類型的な存在のし方」の観点から、あいづち発話の存在様式による機能を考えてみる。あいづち発話のturnが、相手のturnと〈共存〉しているのか、〈独立〉しているのか、とい

う「あいづち発話の独立性」によって、あいづち発話は異なる機能を果たすのである。まず、相手のturnから〈共存〉しているあいづち発話から見る：

【例5】相手のturnと共存して現れるあいづち発話

日女基準	ええー ⁽¹⁾	うんうん ⁽²⁾	うん ⁽³⁾
日女同年	私はけっこうこの辺がもうずっと大学の学科の私の友達だった子、学科の教室がこの辺だったから、今		

例5の発話 no. 62, 63, 64のように、相手の発話と〈共存〉して現れるあいづち発話は、もちろん物理的にはturnを構成し、turnを共存という形で実現していることにより、3.1で述べたごとく、相手のturnの移行に直接関与しない「聞いていることや理解」の機能と、相手のturnの移行に直接関与する「話し手の話の継続を意味する信号」の両方の機能を併せ持ちうるのである。談話の流れにおけるある地点でのマーカー、もしくは信号として、いわば点としての静的な表示機能を果たすといえる。

3.3 あいづち発話の“turn 移行の標識の機能”と“turn 誘発機能”

次に、相手のturnから〈独立〉しているあいづち発話は、先行諸研究が述べている諸機能を果たしながらも、さらに次のような新たな動的な機能も果たす。

相手の発話に対するあいづち発話を話者が発することによって、当該のあいづち発話へとturnが移行したとする。このようなあいづち発話はturnの移行を宣言する標識として機能するものである。つまり、あいづちを打つことそのものが、「今や自分のturnである」と宣言することになるのである。言わば、performative(遂行的)な機能を果たすといえる。

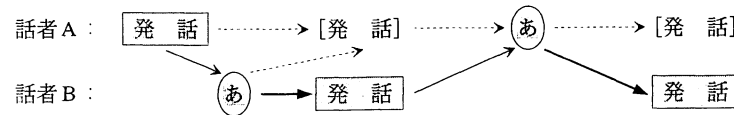
このような機能を“turn 移行の標識の機能”と呼ぶうるであろう。また、話者が相手の発話に対するあいづち発話を発し、一方で、そのあいづち発話が引き金となり、あいづち発話を発した話者、あるいは相手の発話を促す機能をするができる。あいづち発話のこうした機能を、“turn 誘発機能”(trigger function)と名づける。

図5のように、あいづち発話は(1)turn 移行の標識の機能と、(2)turn 誘発機能という2つの機能を担いながら、発話と発話を結ぶ要素として、



図5 発話間におけるあいづち発話の機能

次の発話がどちらの方向へ続いていくのかという、方向づけを司りつつ、談話のダイナミズムを支える“生産的な結節環”(node)となる:



- : 実際に起こった発話
- [] : 起こりえたにもかかわらず、実際には起こらなかった発話
- : 結節環 あ: あいづち発話
- > : 起こりうる turn の展開
- > : 実際の turn の移行
- > : 誘発による実際の turn の移行

図6 生産的な結節環 (node) としてのあいづち発話

生産的な結節環としての役割を果たすあいづち発話は、turn の展開における線的かつ動的な機能を担うものであり、当然のことながら、turn を構成し、獲得するのである。

また、以下の例6の発話 no. 102のように相手の実質的な発話を誘発するあいづち発話と、発話 no. 104のように自分の実質的な発話を導いているあいづち発話は、先の3.1で言う相手のturnの移行に直接関与しない機能と、相手のturnの移行に直接関与する両方の機能を果たす。さらに発話 no. 101と発話 no. 103の間のポーズのように、発話の終了後、および発話と発話の間のポーズは、turn を持っていた話者が相手の何らかの反応を得るために置くポーズであり、相手にturn 獲得の機会を与えているものである。発話 no. 102と発話 no. 104のように、こうしたポーズの中に表われた相手の発話から〈独立〉しているあいづち発話は、次の発話への移行を促し、自分もしくは相手の次の発話を誘発する機能をも果たしていると見ることができる。

〈相手の turn と独立して現れるあいづち発話〉

〈日本語〉

【例6】

日女基準	あー。 ¹⁰²	えー。 ¹⁰⁴ 高校で何を教えて。 ¹⁰⁵
日女同年	戻って来てって感じなんですけど。 ¹⁰¹	その前も、高校でちょっと教えてて ¹⁰³

【例7】

日女基準	前は(学校名)大学っていう所の ⁴⁸	はい ⁵¹	その ⁵⁴ 日本語科です。 ⁵⁵
日女同年		はい ⁴⁹ 語学とか? ⁵⁰	うん。 ⁵² 有名ですよ。 ⁵³

〈韓国語〉

【例8】

韓女基準	(パッケージで行くもので) 패키지로 가는 거. ¹³⁴
韓女年上	맞아요? ¹³⁵ 그러니까 그런 거 보면 가고 싶은데 막상 또 나가려고 하면 (そうですね。だから、そんなの見ると行きたいけど、いざ行こうとすると。)

先行諸研究は、あいづち発話の機能を「聞いていること、理解、話し手の話の継続を促す機能」のように説明しながら、あいづち話者における聞き手としての役割からしかあいづち発話を捉えていなかった。しかし、ここでさらに興味深い事実は、例7の発話 no. 49、発話 no. 52と例8の発話 no. 135を見てもわかるように、あいづち発話を発した話者はあいづちを打つことにとどまらず、そのあいづち発話によって自らの実質的な発話を導いている点である。即ち、あいづち発話は聞き手としての役割のみならず、「あいづち話者における話し手としての積極的な会話参加のストラテジー」として重要な役割を果たしていると言えるのである。あいづち発話のturn 誘発機能とturn 移行の標識の機能を見据えるならば、線的かつ動的な役割と、turn を獲得する話し手側からのストラテジーとしての、あいづち発話の談話におけるダイナミズムが見出せるのである。またこうした2つの機能は本稿のごとく、実質的な発話と共にあいづち発話を、turn の構成要素として、turn の獲得も可能な発話として捉えることにより新たに見出しうる、あいづち発話の動的機能であると

いえる。

4 turnの展開からのあいづち発話

本稿で新たに同定し、提起したturnとしてのあいづち発話とその機能を、日本語と韓国語の実際の談話において検討してみよう。まず、談話のすべての発話をあいづち発話と実質的発話に分類し、一方でturnの形態的、典型的な存在のし方、すなわちturnの存在様式を根幹に据え、あいづち発話が相手のturnと独立、もしくは共存することにより現れる、様相や機能を見ることにする。

4.1 調査方法

本稿は、日本語と韓国語における初対面、2者間の合計12会話⁽⁵⁾をデータとする。談話データの実験の枠組みは、宇佐美(1995)に従った。日韓ともに被験者は、基準話者となる女性の被験者に対し、同性と異性、それぞれ目上、目下、同等の人物を対話者として設定した。被験者の年齢は、基準となる被験者の年齢を20代半ばに定め、目上と目下の被験者は基準話者の年齢から5歳以上の差を置いた。こうした枠組みにより、性別差や年齢差の社会的条件があいづち発話の使用に及ぼす影響⁽⁸⁾に関する考察も可能となる。会話は論者不在で各15分ずつ行い、話題は指定していない。被験者は、日韓それぞれ、東京共通語とソウル方言⁽⁹⁾を日常生活言語として使用している話者に限った。談話は最初の5分間を、金珍娥(2003a)で提起した“複線的文字化システム”によって文字化を行った。

4.2 あいづち発話の時間軸に沿った変化

まず、5分間の談話の中で現われたあいづち発話の全体様相を把握しよう。時間軸に沿った変化に注目する。ここでは両言語それぞれの全話者における1分ごとのあいづち発話の割合を見る。1分ごとの時間変化により、あいづち発話の使用率はどのように動的な変化を示しているのだろうか：

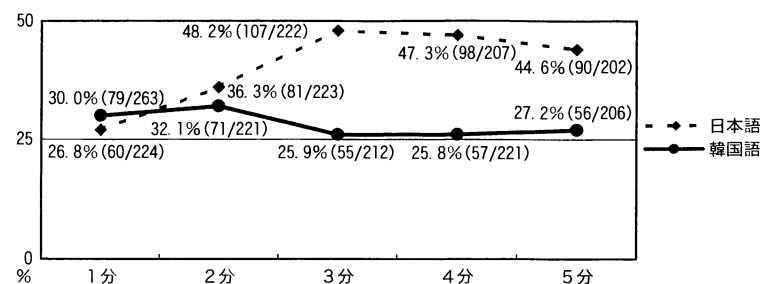


図7 時間軸に沿ったあいづち発話の変化

(数値: 1分ごとの総発話数に占める1分ごとの総あいづち発話数の割合% (1分ごとの総あいづち発話数/1分ごとの総発話数))

日本語におけるあいづち発話の使用率は、初めの1分間が最も低い。しかし、時間の経過と共にその使用率は増加し、3分の経過地点では最も高く、3分以降は使用率が保たれている。一方、韓国語は日本語とは対照的に、あいづち発話の使用率は、最初の1分と2分間が最も高く、2分後は下がり、3分経過地点以後は下がったまま、使用率が保たれている。図7が示しているこうした結果から、少なくともここで見た日本語と韓国語の談話においてあいづち発話は、異なる働きをしていることが推測できる。即ち、日本語におけるこうしたあいづち発話は、会話が盛り上がり、会話の参加者が親密になるにつれ、その使用率が高くなるもので、「会話進行親和のストラテジー」を担うものではないかと思われる。韓国語におけるあいづち発話は、談話の最初の使用率が高く、その後低下することから、会話の初めのぎこちない雰囲気や和らげるための「会話導入融和のストラテジー」であると言えよう。

また、時間軸に沿って現れる両言語のあいづち発話のこうした曲線を、日本語は「低高型」、韓国語は「高低型」とも呼びうるであろう。このように時間軸に沿ったあいづち発話の展開を見ることにより、両言語のあいづち発話のまた異なった働きを見ることができるのである。

韓国語と日本語の各会話の5分間の流れの中で、最も異なる特徴を示している会話の初めの部分に注目し、韓国語と日本語の例を見ながら、あいづち発話の現われる様相の違いを確認しよう：(発話:turnの重複、

発話: あいづち発話)

〈日本語〉

【例 9】

日女基準	こんにちは。 ¹ はじめまして。 ² えと、JFBと ³ いいます。 ⁴ えーと、日本語科の
日女同等	こんにちは。 ² はじめまして。 ¹ と、お名前 ³ は ⁴
日女基準	修士二年で、(名前)ちゃんと同じ学年です。 ⁵ あ、JFS ちゃんです。 ¹⁰
日女同等	あ、私は JFS です。 ⁹ え、なんで JFS なんです。(笑い) ¹¹

【例 10】

日女基準	はじめまして。 ¹ えーと、JFB と言います。 ² JMS 君。 ⁵
日男同等	はじめまして。 ² JMS って言います。 ⁴ はい。 ⁸ えーと、同い年 ⁷
日女基準	同い年なんですか? ³ え? ¹⁰ 50 年です。 ¹² 昭和たて 55 年 ¹³ あ、一緒だ。 ¹⁷ え、そなんですか? ¹⁹
日男同等	ですか? ³ え、何 ¹¹ あ、私も 50 年 ¹⁵ うん、あんまり ¹⁸

〈韓国語〉

【例 11】

韓女基準	(こんにちは、 ¹ はい。 ² はい。) 안녕하세요! ¹ 예 ² 예 ²
韓男年下	안녕하세요. ² 그런 제 소개부터 하지요. ⁴ (이름)대학교 한국경영학문, 다지말 해야지구 일여 (こんにちは、自己紹介からします。(大学名)大学 韓国経営学門、多志望して、日語)
韓女基準	(え、 ³ (笑い) あ、クラス代表らしい自己紹介ですね。(笑い) あ、) 예 ³ 웃음 ⁹ 아, 소개하는 게 과대 같아요. <웃음> ¹⁰ 저,
韓男年下	일문관데요. ⁶ 99학번 1학년 1학기 과대 KMY 이라고 해요. ⁸ (日文学科で、99学番1年生前期クラス代表 KMY と言います。)
韓女基準	(私も日文科です。私は95学番で、今年卒業して はい。研究所に今) 저두 일문과예요. ¹¹ 저는 95학번이구요! ¹² 올해 졸업 해 갔구! ¹⁵ 네! ¹⁷ 연구소에 지금
韓男年下	아! ² 아! ⁴ 선배님이시네요! ¹⁰ (あ あ 先輩でいらっしゃいますね。)

【例 12】

韓女基準	(こんにちは、はい。95学番でいらっしゃんでしょう。はい。私も95学番ですから。(名前)ちゃんのお友達です。) 안녕하세요! ¹ 예 ² 95학번이시죠. ⁴ 예 ² 저두 95학번이거든요. ⁷ (이름)이 친구예요. ⁹
韓男同等	예 ² 예 ² 예예 ² (はい。はい。 ええ。)
韓女基準	(はい。私 KFB です。 はい。何専攻ですか?) 예. ¹¹ 저 KFB 거든요. ¹² 예. ¹⁵ 무슨 과세요? ¹⁰
韓男同等	(이름)이요? ¹⁰ 예. ³ 저 KMS 이요. ¹⁴ 재료공학과요. ¹¹ (名前)ちゃんですか? はい。私は KMS です。 材料工学です。)

【例 13】

韓女基準	(いいえ。私、教務補佐です。 私76です。 あ、同い年) 아뇨. ² 저 조교거든요. ³ 저 76이요. ⁴ 아! ¹¹ 동갑! ¹²
韓女同等	학생이세요? ¹ 아-? 몇 년? ⁷ 아-? 겨랄 동갑이시네요! ¹⁰ (学生ですか? あー。何年? あ。私と同い年でいらっしゃるんですね。)

上記の韓国語と日本語の例は会話の初めのあいさつ部分を取り出したものである。例から2つの違いに注目したい。1つ目は、会話の初めの挨拶部分では、日本語はturnの重なりが目立つが、韓国語においてはほとんどturnの重なりは現われていない点である。2つ目は、日本語に比べ韓国語は、あいづち発話の頻度は非常に多く現われており、目立つ傾向を示している点である。また、こうした2つの特徴はあいづち発話が持っている機能を、積極的な〈turnの重ね〉も担当していることを示唆している。すなわち、turnの重なりはあいづち発話の機能の一つである「聞いている」という機能の現れでもあり、一緒になって会話に参加し、共有しながら共に会話を創り上げていく「共有」の機能の現れでもあると考える。会話の初めのあいさつの部分で、日本語が、韓国語よりturnの重なりは多いが、あいづち発話は少ないという事実は、日本語にはあいづち発話の機能として〈turnの重ね〉というデバイスが用いられている可能性が考えられるのである。

4.3 turn の存在様式から見たあいづち発話

4.3.1 あいづち発話の割合

turnの存在様式、すなわち相手のturnと独立、共存して現れるあいづち発話の比率を図8に提示する。

図8を見ると、日本語では、相手のturnから独立したあいづち発話と共存するあいづち発話は、同程度の割合で使用されているが、韓国語では、独立しているあいづち発話が、共存しているあいづち発話の3倍以上の割合を占めているのである。また、実質的発話の頻度は日本語より韓国語が高く、あいづち発話の頻度は韓国語より日本語が高いことがわかる。このことは日本語のあいづち発話が韓国語より圧倒的に多いとい

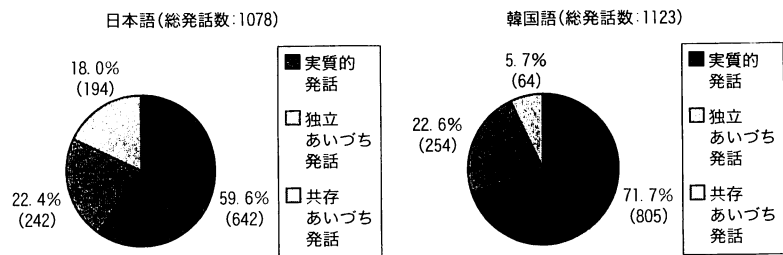


図8 turnの独立性によるあいづち発話の比率
(数値: 総発話数に対する各項目の頻度と割合)

う、舟橋 (1994)、金志宣 (2000) の報告にも見えている通りである。しかし、さらにturnの存在様式の観点からturnとしてのあいづち発話の機能を見据えると、単純に両言語におけるあいづち発話の量的な違いにとどまらず、形態的な存在のし方による次のようなあいづち発話のありようが見えてくる。すなわち、相手の発話と共存するあいづち発話は、日本語が韓国語の3倍ほどの高い頻度を示している一方で、相手の発話から独立しているあいづち発話は、両言語がほぼ同程度の割合を示している点である。

4.3.2 あいづち発話のturn移行の標識の機能とturn誘発機能

上の図8を見ると、相手の発話から独立しているあいづち発話は、両言語がほぼ同程度の割合を示している。こうした結果は、独立しているあいづち発話について提起した、turn移行の標識の機能とturn誘発機能が、両言語において同程度働いているということである。こうした事実から、あいづち発話の使用頻度は日本語に多いが、談話の流れを保つ機能であるとも言える、上記の2つの動的機能を司るあいづち発話は、韓国語においても日本語に劣らぬほど働いており、韓国語の談話のダイナミズムを支えているものと考えうるのである。以下、相手の発話から独立しているあいづち発話の例を見ながら、turn移行の標識の機能とturn誘発機能を確認しよう:

〈日本語〉

【例14】

日女基準	私、えーと、英会話学校へ行っているんですけど ⁶⁸ たまに行っているんですけども、そこで会って ⁶⁹ あ、外大
日男年下	はい ⁷⁰ あ ⁷¹
日女基準	なんですか ⁷² っていう話になって、で、あ、どうもどうもと、一回 ⁷³ お茶を飲んだのです ⁷⁴ 彼は私の方が
日男年下	はい ⁷⁵ はい ⁷⁶

【例15】

日女基準	いるんな人がいるから ¹⁴⁸ どの人が先生だかわかんない。(笑い) ¹⁵⁰
日男同等	うん ¹⁴⁹ あ ¹⁵¹ それは本当 ¹⁵² 僕の、うちの大学院も(中略)
日女基準	うふん ¹⁶⁰ ね ¹⁶² どっちが先生だか、わかんないね、本当に ¹⁶³
日男同等	後はみんな年上だから、うん ¹⁶⁵ 過ぎてる人とか ¹⁶⁴

〈韓国語〉

【例16】

韓女基準	(私(名前)です。あ、私 今卒業して 人文科学研究所という その今インターン補佐で) 저(이름)이예요. ³⁹ 아 ⁴¹ 저 지금 졸업하구요 ⁴² 인문과학연구소라고 거기 지금 인턴 조교로
韓女年下	(이름)이예요? ³⁸ 네 ⁴⁰ 예 ⁴³ (名前)ですか? はい。 え.)
韓女基準	(いるんです。これからまた学校通う間はずっと学校で会えるわね。(笑い) 있거든요. ⁴⁴ 앞으로 또 학교 다니는 동안 계속 학교에서 보겠단. ⁴⁶ <웃음> ⁴⁵
韓女年下	예 ⁴⁵ (はい。 예 ⁴⁷ (はい。)

【例17】

韓女基準	(あ、(なまえ)ちゃんがたくさんの男の子と会ってるから。) 아 ⁷⁹ (이름)가 하도 많은 남자들을 만나니까 ⁸⁰
韓男同等	몇 번 보지 않았나요. ⁷⁷ 그렇게 뭐 <웃음> ⁷⁸ 아 ⁸¹ 개인데 (何回か会ってなかったですかね、それほど何か(笑い) あ、あの子どもと)
韓女基準	(あ(笑い) 多分何回か会ったかもしれませんがね。) 아 <웃음> ⁸³ 아마 몇 번 봤을기도 했을 거예요 ⁸⁴
韓男同等	마당밭이거든요. ⁸² (顔が広いもんですから。)

日本語においては例14のあいづち発話と例15の発話 no. 149、韓国語においては4.1.1の例11、例12、例13と共に、例16の発話 no. 43と発話

no. 45は、〈相手のturn〉を誘発し、移行して行く、turn 誘発機能とturn 移行の標識の機能を司っているあいづち発話である。また、日本語の例15の発話no. 151、発話no. 152、発話no. 162、韓国語の例17の発話no. 179、発話no. 181、発話no. 183のあいづち発話は、〈あいづち発話の話者である自分のturn〉を誘発し、移行して行く、turn 誘発機能とturn 移行の標識の機能を司っているあいづち発話である。このようにあいづち発話の動的機能である、turn 誘発機能とturn 移行の標識の機能は、相手のturnのみならず、話者自分のturnにも働きかける機能であるといえる。先行研究は、あいづち発話の機能を「聞いていること、理解、話し手の話の継続を促す機能」などと説明しながら、聞き手の役割からしかあいづち発話を捉えていなかった。しかし、上記の例15の発話no. 151、発話no. 152、発話no. 162と例17を見てもわかるように、あいづち発話を発した話し手はあいづちを打つことにとどまらず、そのあいづちによって話し手の実質的な発話を導いており、あいづち発話そのものがturnを獲得することに成功している。すなわち、あいづち発話は聞き手側のみではなく、「話し手側の積極的な会話参加のストラテジー」として重要な役割を果たしていると言えるのである。あいづち発話のturn 誘発機能とturn 移行の標識の機能を見据えるならば、線的かつ動的な役割と、turn を獲得する話し手側からのストラテジーとしての、あいづち発話の談話におけるダイナミズムが見出せるのである。

また、金珍娥(2003a)では、turn を獲得する実質的発話とあいづち発話の割合は、両言語共に3:2の比率を示しており、あいづち発話のturn 獲得は、実質的発話によるturn の獲得に劣らぬ比重を示していると報告した。これはあいづち発話のturn 誘発機能と、turn 移行の標識の機能を基に、turn としてのあいづち発話の機能を見ることで得られた結果である。

5 おわりに

本研究では、turn の移行という、従来の研究と異なる観点から韓国語と日本語におけるあいづち発話の機能を考察した。あいづち発話は、(1) 実質的発話と同様、turn の構成要素であり、turn を獲得する発話である

こと、(2)〈turn 誘発機能〉と、〈turn 移行の標識の機能〉という2つの機能を司り、線的かつ動的役割を果たしていることを提起した。

また、あいづち発話の使用を実際の談話を用いて検討した結果、単に、韓国語より日本語にあいづち発話が多いという、頻度の差のみにとどまらず、次のような新たな示唆を得ることができた。(1)〈相手のturn と共存しているあいづち発話〉は日本語に多いが、〈相手のturn と独立しているあいづち発話〉は韓国語と日本語が同等の比率を示しており、韓国語のあいづち発話も日本語に劣らぬほどの、談話のダイナミズムを支える、線的かつ動的な機能を果たしていること、(2)あいづち発話のturn 誘発機能と、turn 移行の標識の機能を見据えることにより、あいづち発話は「聞いている」という聞き手側の機能のみならず、turn を獲得する「話し手側の積極的な会話参加のストラテジー」として重要な役割を果たしていること、(3)日本語に多く現れる〈turn の共存〉のうち、積極的な〈turn の重ね〉も、あいづち発話と共にあいづち発話の機能の一部を担いうること、などを確認することができた。

これらの結果は、あいづち発話をturn として捉え、あいづち発話が相手のturn と独立しているのか、共存しているのかというturn 存在様式の観点からあいづち発話を照射することにより、得られた結果である。こうした本質的な談話の流れに目を向けることにより、あいづち発話の、新たな機能と談話におけるダイナミズムが見出されると同時に、韓国語と日本語の会話スタイルの異なる様相を見究めうるであろう。

本稿は限られたデータによる仮説に留まる部分もあるがゆえに、今後より多くのデータを用いた研究が必要であろう。

【謝辞】本稿の執筆にあたって、東京外国語大学の指導教官野間秀樹教授、及び富盛伸夫教授にご指導いただきました。この場を借りて心から感謝申し上げます。

註

- (1) 金珍娥(2002)は、あいづち発話のスピーチレベルを次のように分類している:

	1 文法的対立項を持つ相づち	2 語彙的対立項を持つ相づち	3 対立項を持たぬ相づち
	述部のある相づち	述部のない相づち	
敬体P	そうですね、そうですか	はい、やはり	え、ええ、
常体N	そうだね、そうか	うん、やっぱり	へ、あ、んん、ねえ

- (2) turn と turn-taking についての詳細は金珍娥(2003a) 参照。
 (3) 図4のあいづち発話の共存 turn, 独立 turn 参照。
 (4) 以下の例文では次のような訳語で会話に参加している2人の話者の属性を示す。

日:日本語母語話者, 韓:韓国語母語話者, 女:女性, 男:男性, 基準:基準話者, 同等:基準話者と年齢が同等, 年上:基準話者より年上, 年下:基準話者より年下 会話の組み合わせは註6参照。

- (5) 会話以外の重要な副次的データとして、宇佐美(1995)にならい、会話開始前、年齢、性別、出身地などを尋ねる質問紙調査と、会話終了後、相手や会話に対する感想を尋ねるフォローアップアンケートを行なった。フォローアップアンケートでは、5段階に分けて会話の自然さを尋ね、会話が不自然だったと答えた被験者の会話は、本稿のデータとしては用いず、同じ条件の下に、他の被験者との会話を行なった。実験場所は、日本語は東京の、韓国語はソウルの大学の講義室である。
 (6) 被験者は、日本語母語話者7名(基準話者女性1名, 対話者女性3名, 対話者男性3名), 韓国語母語話者7名(基準話者女性1名, 対話者女性3名, 対話者男性3名)である。また、韓国語母語話者のほとんどは日本語の学習経験がない。ただ、2人の被験者は大学生の時、第2外国語として日本語を学んだが、日本への留学経験もなく、日常生活の言語使用において日本語の影響はないと考えられる。
 (7) 会話終了後行なったフォローアップアンケートの質問項目において、基準話者と対話者がそれぞれ、相手に対し自分の普段どおりに話せる話しやすい相手であると答えているので、基準話者の個人的特徴の会話への影響は極めて小さいものと考えられる。
 (8) 今回のデータでは年齢差と性別差によるあいづち発話の使用頻度の違いは現れなかったが、対話者と基準話者におけるあいづち発話の使用頻度の違いが見られた。対話者より基準話者が、あいづち発話の使用においては日本語では1.28倍、韓国語では2.11倍多い。こうした傾向からあいづち発話は、基準話者が会話を円満に進行させるために用いるストラテジーを実行するものであると

も考えうる。会話をリードする司会者的役割の話者が用いるストラテジーの特徴を“司会者性”とよびうるであろう。談話の構成素に談話における自己の役割を認識しているものが存在するとき、こうした司会者性は、あいづち発話に潜在していると思われる。

- (9) 会話文字化の時間は、初対面の会話の特徴がもっとも現れる最初の5分間を文字化した。
 (10) こうした turn の重複を、Murata(1994)は“co-operative interruption”(協力的干渉)、Yule(1995:76)は“involvement style”(共感のスタイル)と呼んでいる。詳細は金珍娥(2003a)参照。

参考文献

- 李善雅(2001)「議論の場におけるあいづち—日本語母語話者と韓国学習者の相違—」『日本語教育論集 世界の日本語教育』第11号 東京:国際交流基金日本語国際センター
 任栄哲・李先敏(1995)「あいづち行動における価値観の韓日比較」『日本語教育論集 世界の日本語教育』第5号 東京:国際交流基金日本語国際センター
 宇佐美まゆみ(1995)「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』東京:昭和女子大学近代文化研究所
 生越直樹(1988)「朝鮮語のあいづち—韓国学生レポートより—」『日本語学』vol. 7 no. 13 東京:明治書院
 金志宣(2000)「turn 及び turn-taking のカテゴリー化の試み—韓・日の対照会話分析」『日本語教育』105号 東京:日本語教育学会
 金珍娥(2002)「日本語と韓国語における談話ストラテジーとしてのスピーチレベルシフト」『朝鮮学報』第183輯 天理:朝鮮学会
 金珍娥(2003a)「韓国語と日本語における談話構造—“turn-taking システム”から“turn-exchanging システム”へ—」『朝鮮学報』第187輯 天理:朝鮮学会
 金珍娥(2003b)「韓国語と日本語の文、発話単位、turn—談話分析のための文字化システムによせて—」『朝鮮語研究会第200回記念国際学術大会発表論文集』東京:朝鮮語研究会
 クールタード、マルコム(1999)『談話分析を学ぶ人のために』東京:世界思想社
 黒崎良昭(1987)「談話進行上のあいづちの運用と機能—兵庫県滝野方言について—」『国語学』150号 東京:国語学会
 黒沼祐佳(1996)「会話における turn-taking と情報共有のイニシアティブの関係」『筑波大学応用言語学研究』3 筑波:筑波大学
 小宮千鶴子(1986)「あいづち使用の実態—出現傾向とその周辺—」『語学教育研究論叢』東京:大東文化大学語学教育研究所
 小室郁子(1995)「“Discussion”における turn-taking—実態の把握と指導の重要性」

- 『日本語教育』85号 東京：日本語教育学会
- ザトラウスキー, ポリー (1993) 『日本語研究叢書5 日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』東京：くろしお出版
- 杉戸清樹 (1987) 「発話のうけつぎ」『国立国語研究所報告92 談話行動の諸相 談話行動の分析』東京：三省堂
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』東京：むぎ書房
- 杉藤美代子 (1993) 「効果的な談話とあいづちの特徴及びそのタイミング」『日本語学』vol. 12 no. 4 東京：明治書院
- ソシュール, フェルディナン・ド (1940, 1972) 小林英夫訳『一般言語学講義』東京：岩波書店
- 陳姿菁 (2001) 「日本語の談話におけるあいづちの類型とその仕組み」『日本語教育』108号 東京：日本語教育学会
- 塚原渉・ワード, ナイジェル (1997) 「理解を介さない会話現象としてのあいづち」『言語』vol. 26 no. 10 東京：大修館書店
- 時枝誠記 (1950) 『日本文法 口語篇』東京：岩波書店
- 中田智子 (1991) 「会話に現れるくり返しの発話」『日本語学』vol. 10 no. 10 東京：明治書院
- 西原鈴子 (1991) 「会話の turn-taking における日常的推論」『日本語学』vol. 10 no. 10 東京：明治書院
- 仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人 (2000) 『日本語の文法1 文の骨格』東京：岩波書店
- 服部四郎 (1949) 「具体的言語単位と抽象的言語単位」『コトバ』2-12 東京：国語文化学会(国語学研究『コトバ』第27巻 東京：ゆまに書房)
- 島弘巳 (1982) 「コミュニケーションのための日本語教育」『言語』vol. 11 no. 13 (臨時増刊号) 東京：大修館書店
- 舟橋宏代 (1994) 「談話の進行における日韓語母語話者の姿勢」『平成6年度 日本語教育学会春秋大会予稿集』東京：日本語教育学会
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』東京：くろしお出版
- 松田陽子 (1988) 「対話の日本語教育学—あいづちに関連して—」『日本語学』vol. 7 no. 13 東京：明治書院
- 水谷信子 (1983) 「あいづちと応答」『話しことばの表現 講座日本語の表現3』水谷修編 東京：築摩書房
- 水谷信子 (1988) 「あいづち論」『日本語学』vol. 7 no. 12 東京：明治書院
- 水谷信子 (2001) 「あいづちとポーズの心理学」『言語』vol. 30 no. 7 東京：大修館書店
- 南不二男 (1987) 「談話行動論」『国立国語研究所報告92 談話行動の諸相 談話行動の分析』東京：三省堂

- メイナード, K. 泉子 (1987) 「日米会話におけるあいづち表現」『言語』vol. 16 no. 12 東京：大修館書店
- メイナード, K. 泉子 (1993) 『会話分析』東京：くろしお出版
- ヤーコブソン, R (1973) 『一般言語学』田村すず子・村崎恭子・長嶋善郎・中野直子共訳 川本茂雄監修 東京：みすず書房
- 김태자 [金泰子] (1987) 「발화분석의 화행의미론적 연구—어학의 문학에로의 접근—」서울：탑출판사
- 남기심, 고영근 [南基心, 高永根] (1993) 「표준 국어문법론」서울：탑출판사
- 노마히데키 [野間秀樹] (1996a) 「현대 한국어의 대우법 체계」『말』제21집 서울：연세대학교 연세어학원 한국어학당
- 노마히데키 [野間秀樹] (1996b) 「한국어 문장의 계층구조」『언어학』제19호 서울：한국언어학회
- 노마히데키 [野間秀樹] (2002a) 「한국어 어휘와 문법의 상관구조」서울：대학사
- 노마히데키 [野間秀樹] (2002b) 「한국어 단어결합론의 심화를 위하여」『국어학』제39호 서울：대학사
- 노석기 [盧石基] (1990) 「우리말 담화의 결속관계 연구」『한글』제208호 서울：한글학회
- 서상규, 구형정 공편 (2002) 「한국어 구어 연구(1) —구어 전사 말뭉치와 그 활용—」연세대학교 언어정보개발연구원 서울：한국문화사
- 서정수 [徐正洙] (1996) 「국어문법」서울：한양대학교출판부
- 오승신 [吳丞信] (1997) 「담화상에서의 간투사의 기능」『말』제21집 서울：연세대학교 연세어학원 한국어학당
- 윤석민 [尹錫敏] (1996) 「현대국어의 문장종결법 연구」서울：아르케
- 이원표 (1999) 「토크쇼에서의 말 끼어들기：담화 기능과 사회적 요인」『담화와 인지』제6권2호 서울：담화 인지 언어학회
- 이익섭, 임홍빈 [李翊燮, 任洪彬] (1983) 「국어문법론」서울：학연사
- 張奭鎭 (1992) 「話用論研究」서울：塔出版社
- Bloomfield, L. (1962) *Language* New York: Holt, Rinehart and Winston (三宅鴻, 日野資純訳 (1965) 『言語』東京：大修館書店)
- Brown, G., & Yule, G. (1983) *Discourse Analysis* Cambridge: Cambridge University Press
- Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage* New York: Cambridge University Press
- Brown, R. (1998) Turn-Taking and Topic Management in Conversational English: A Pedagogical Perspective 『西南学院大学英語英文学論集』38 福岡：西南学院

大学

Coulthard, R. M. (1977, 1985) *An Introduction to Discourse Analysis* London: Longman (吉村昭市, 貫井孝典, 鎌田修訳 (1999) 『談話分析を学ぶ人のために』東京: 世界思想社)

Edwards, J. A. & Lampert, M. D. (Eds.) (1993) *Talking Date: Transcription and Coding in Discourse Research* Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associate

Fries, C. C. (1952) *The Structure of English: An Introduction to the Construction of English Sentences* New York: Harcourt, Brace (福村虎治郎訳 (1959) 『英語の構造』東京: 研究社)

Gumperz, J. J. (1982) *Discourse Strategies* Cambridge: Cambridge University Press

Harris, Z. S. (1951) *Structural Linguistics* (Method in Structural Linguistics) Chicago: University of Chicago Press

Komatsu, R & Harris, R. (1993) *F. de Saussure Troisieme Cours de Linguistique Generale (1910-1911) d'après les cahiers d'Emile Constantin Saussure's Third Course of Lectures on General Linguistics (1910-1911) from the Notebooks of Emile Constantin* New York: Pergamon Press (相原奈津江・秋津伶訳 西川長夫解題 (2003) 『フェルディナン・ド・ソシュール 一般語学第三回講義 コンスタンタンによる講義記録』京都: エディット・パルク)

Leech, G. (1983, 1999) *Principles of Pragmatics* New York: Longman

Leech, G., Myers, G. & Thomas, J. (Eds.) (1995) *Spoken English on Computer* New York: Longman

Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics* Cambridge: Cambridge University Press

Murata, K. (1994) Invasive or Co-Operative a Cross-Cultural Study of Interruption *Journal of Pragmatics* 21

Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974) A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking in Conversation *Language* 50

Schegloff, E. A (1982) Discourse as an Interactional Achievement: Some Use of 'uh huh' and Other Things That Come between Sentence *Analyzing Discourse: Text and Talk* ed. by Deborah Tannen Washington, D. C: Georgetown University

Schiffrin, D. (1987) *Discourse Markers* Cambridge: Cambridge University Press

Scollon, R., & Scollon, S. W. (1995) *Intercultural Communication: A discourse Approach* Oxford: Blackwell

Yngve, Victor, H. (1970) On Getting a Word in Edgewise *Chicago Linguistics Society* 6

Yule, G. (1995) *Pragmatics* New York: Oxford University Press

Van Dijk, T. A. (1997) 'The Study of Discourse' in van Dijk, T. A. (ed) *Discourse as Structure and Process* London: Sage
(東京外国語大学非常勤講師・181-0016東京都三鷹市深大寺1-11-26-310)

人文科学 第八五輯 二〇〇三年十二月 延世大学校人文科学研究所

全北史学 第二六輯 二〇〇三年十二月 全北大学校史学会

설비투자계획조사 第七〇号 二〇〇三年十二月 한국산업은행

龍仁西里高麗白磁瓦窯(發掘調査報告書Ⅱ) 二〇〇三年九月 湖巖美術館

大東文化研究 第四四輯 二〇〇三年十二月 成均館大学校大東文化研究院

中国語文学 第四二輯 二〇〇三年十二月 嶺南中国語文学会

東亜文化 第四一輯 二〇〇三年十二月 서울大学校東亜文化研究所

東方学誌 第二二一〜二四輯 二〇〇三年九月、十二月、二〇〇四年一月、三月 延世大学校国学研究院

東洋学 第三四輯 二〇〇三年八月 檀国大学校東洋学研究所

東洋史学研究 第八五輯 二〇〇三年十二月 東洋史学会

법제 一一二、一二号 二〇〇三、二〇〇四年 법제처

美術史論壇 第一六・一七号 二〇〇三年上半期 韓国美術

研究所

歴史学報 第一八〇輯 二〇〇三年十二月 歴史学会

歴史学報総目録(第一〜一八〇輯) 二〇〇三年十二月 歴史学会

歴史教育 第八八輯 二〇〇三年十二月 歴史教育研究会

KOREA JOURNAL Vol. 43 No. 3 Autumn 2003 Korean National Commission for UNESCO

KOREA OBSERVER Vol. 34 No. 3, 4 Autumn, Winter 2003 The Institute of Korean Studies

Economic Report Vol. 18 No. 7-9 July-Sept. 2003 Korea Economic Report

Koreana KOREAN ART & CULTURE Vol. 17 No. 3, 4 Autumn, Winter 2003 Vol. 18 No. 1 Spring 2004 The Korea Foundation

Korea Now Oct.-Nov. 2003 Radio Korea International NEWS WORLD Vol. 11 No. 127-129 Sep.-Nov. 2003 NEWS WORLD Co.

Korean History Vol. 4 Aug. 2003 Center for Korean History, Institute of Korean Culture